北里大学高等教育開発センターニュース

Center for Development of Higher Education, Kitasato University NEWS

Vol.16

Contents

巻頭言 ―― 1

LGBT講演会実施報告
・講演会概要 ―― 2
・講演会アンケート結果 ―― 4

編集後記 ―― 4

巻　頭　言

高等教育におけるLGBTを考える

高等教育開発センター　センター員　守屋　利佳

2018年2月5日，宝塚大学看護学部　日高庸晴教授の「LGBT学生への支援体制」と題する講演が行われた。

LGBTをはじめとするセクシャルマイノリティは人口の５～８％程度存在すること，それは左利きの頻度と同じ程度であるが，LGBTの人々がいじめに遭ったり，不登校になったりする率はかなり高いこと，自傷率も高く，それもカミングアウトした後のほうが高いという話を伺い，LGBTの人々への対応の現状に改めて愕然とした。

マイノリティであること

眼鏡やコンタクトレンズを使用している人はかなり多く，そのような人々を「個性のある人」ととらえることはあっても，「特殊な人」という認識はほとんどしないのではないか。これは，眼鏡を使用する人の数が多いことがその理由と考えられる。

では左利きの場合はどうであろう。左利きの頻度はLGBTと同じかやや多い程度と言われている。左利きの人を見て，やはり「マイノリティで大変な思いをしている人」という認識はあまりないのではないか。私自身左利きで，随所で多かれ少なかれ不便な思いをすることはあっても，一つの特徴あるいは個性ととらえて過ごしてきた。確かに，以前の日本の文化では左利きは「忌み嫌うもの」とされ，矯正されることが多かったことも事実であるが，現在ではそのような傾向も薄れてきている。

そのように考えたとき，左利きと同じ頻度と言われるLGBTに対する認識がなぜこのように異なるのか。性的指向や性自認に対しては「かくあるべき」というものが確固としていること，性別というものは生物学的に“決まっている”と考えられていること，左利きのように目に見えないため，他人にわかりづらく，そのような人の存在を知る機会が少ないこと，などが考えられる。左利きもかつては忌み嫌われ，矯正される人もいた時代があったこと，今ではそのようなことが減ってきていることを考えると，今後LGBTの人々への視線や対応も変わっていくのであろうか。

高等教育の現場で行うべきこと

日高先生の講演や資料からは，すでに初等教育の現場では対応が進められていること，特に教員への研修も始まっていることが紹介された。性的指向の自覚や性自認が思春期と重なることを考えると，初等教育からの対応が大切であることが容易に認識できる。高等教育の時期においてもその後のライフイベントと重なるため，同様に，あるいはそれ以上に対応が必要となる場面が出てくると考えられる。まずは教員が自覚し，研修を受けることが必要であろう。大学で行うべきことの中に，カウンセリングや「多目的トイレ」の設置などの他，性別の表記を外すことやLGBTに関する必修のカリキュラム作成など，想像以上の提案がなされていた。

「多様性を受け入れる」マインドがあれば，また，想像力を持ってことに向かうことができれば，このような現状に対応することができるのでは，そして「多様性」の範囲に制限を置かないことも大切なのではないかと考えさせられた講演であった。

講演会概要

2018年2月5日（月）15時より，高等教育開発センターと健康管理センターの共催で「LGBT学生への支援体制」というテーマの講演会が行われました。相模原キャンパスをメイン会場として，白金，十和田，北本，新潟の各キャンパスをTV会議システムで結び，152名の教職員が聴講しました。今回は，今日の教育現場では避けてとおれない，性的マイノリティへの支援というテーマで，日高庸晴宝塚大学看護学部教授（日本思春期学会理事・厚生労働省エイズ動向委員会委員）を講師としてお迎えし，実施いたしました。伊藤智夫学長の挨拶に引き続き，約70分間の講演，その後，守屋達美健康管理センター長を座長としての質疑応答が行われました。

本学ではこれから組織的な支援体制の整備を検討していく段階であり，大変タイムリーなテーマであったことと，日高先生が様々な事例を紹介しつつお話しを進められたこともあって，大変有意義な講演会となりました。また，講演中に示されたデータから推測すると，本学では大学院を含めると約8000人の学生がいますので，おおよそ400人の性的マイノリティの学生がいると考えられるという事実を認識し，今後本学でも取り組まなくてはならない課題が明確になったように思います。一方，いざ現実の取り組みを考えることになると，非常に多くの微妙な問題を内包しているテーマであるため，性的マイノリティへの支援対策に取り組むのは，容易ではないとも感じられました。しかし，この講演会をきっかけに，問題の所在が明確になり，支援の体制作りへの手がかりを教えていただいたので，一歩一歩進めていかなくてはならないという共通認識が，聴講者の間で醸成されたのではないかと思われます。それと同時に，こうした意識を学内に広める必要性も感じられました。

なおこの講演会は，内容が大変センシティブであることから，録音・録画は遠慮願いたいという講師のご意向により，記録を取ることができなかったことから，従来の講演会のように講演を叢書にまとめることができません。その代わり，以下に講演のレジュメを掲載することで，多少なりとも学内への発信ができればと思います。

講演レジュメ

「性的マイノリティ」(LGBT）とは，「性的指向」(Sexual Orientation）を表わすレズビアン（Lesbian)，ゲイ（Gay)，バイセクシュアル（Bisexual)，様々な「性自認」(Gender Identity）を持つトランスジェンダー（Transgender）に分かれており，それぞれ人口に占める割合は，レズビアン，ゲイ，バイセクシュアルが約5.38％，トランスジェンダーが0.47％と考えられている。つまり人口の5％強が性的マイノリティと考えられる。それに対して，日本における性的マイノリティへの配慮は到底十分とは言えず，政治家の発言やマスメディアの扱いなど，無神経な言葉が繰り返されているのが実情である。国としても2002年の法務省による「人権教育・啓発に関する基本計画」に始まり，2016年文部科学省による「性同一性障害や性的指向・性自認に係る，児童生徒に対するきめ細かな対応等の実施について（教員向け)」の発行など，様々な取り組みを行ってきているが，性的マイノリティの人権を擁護する法律はいまだ整備されていない。一方国際的には，国連の人権理事会が2011年6月に「人権と性的指向・性自認」決議を採択，同年11月には国連人権高等弁務官が「性的指向及び性自認を理由とする個人に対する差別的な法律，慣習及び暴力」と題する報告書を作成し，性的マイノリティの人権を守る努力をしているが，日本では国連人権機関による再三の勧告にも従わず，人権擁護の観点での国内法の整備は進んでいない。また，オリンピック憲章でも，明確に性的指向に起因する差別を禁じている。世界の動向に，日本は追いついていないのが現状である。

講師　日高庸晴氏

性同一性障害者に対する学校での支援については，2015年4月の文部科学省通知により，性別違和を持つ児童生徒への対応事例が公表されたが，どのように支援をするかは各現場に判断が委ねられているのが現状である。また，日本の性別取扱変更の要件についても，2003年7月には「性同一障害者の性別の取り扱いの特例に関する法律」が作られ，2008年には改正されたが，他の国に比べて厳しい要件設定がされており，今後議論になることもあるであろう。

性的マイノリティの人たちは，社会生活において，例えば，周囲から異性との結婚を勧められる，孫の顔が早く見たいなど，異性愛者であることが前提の話をされたり，服装や会話で周囲の目を気にしたりと，非常につらい思いをするとともに，強いストレスを感じている。その結果，性的マイノリティの人の約40％はメンタル面での問題を抱えることになっている。自分の性的指向・性自認を内に秘めて生活しているストレスのため，抑うつや不安傾向が他の人たちより高いと言える。

大学までの学校現場では，性的指向・性自認が原因で「いじ

会場の様子

め」の対象になり，そのため不登校になり，自傷行為につながる傾向が顕著である。性的マイノリティの人が高校までに「いじめ」を経験した割合は，58％である。それに対して教員が解決に役立ったかという調査では，全体で13.6％と低いが，若年層ほど役立ったという認識が高くなっている。多様な価値観のもとで育った教員が増えてきているからとも考えられる。

さて，性的マイノリティの人の5人に1人が，自分の親にカミングアウトしている。これは都市部が高率という傾向があり，地域差がある。また，ゲイとバイセクシュアル男性の自殺未遂リスクを見ると，異性愛男性より5.98倍高く，友人にカミングアウトしている人ほど自殺未遂リスクは高くなっている。これは，理想的には抵抗なくカミウングアウトができる環境が望ましいと思われるが，現実的には社会全体がそこまで成熟しておらず，カミングアウトしたことにより，様々な耐え難い経験をする事に起因すると考えられる。一方トランスジェンダーの自殺未遂率も日本を初め，外国でも高率となっている。現代でも，依然として，性的マイノリティの人々が大きなストレスを感じる，暮らしにくい社会が続いていると言える。なお，カミングアウトについては，本人の判断によってなされるものであり，周囲がそれを促すなどは絶対にあってはならない。また，その相手も親である必要はなく，本人が信頼できると感じる人に対し，本人が打ち明けたいと思うことで，はじめて成立することに留意する必要がある。

自分が同性愛者であると考えたり，あるいは迷ったり，自分が性的マイノリティに属するという意識を持つ人は，中学・高校までの学齢期でもかなり多く，そうした人が大学に入ってくる。大学ではそうした学生に適切な支援体制を整えるべきである。

そこで，そうした性的マイノリティの人々に対する支援を大学でどう行っていったらよいのかということで，以下のことを挙げたい。

①性的指向，性自認，性別表現に基づくハラスメントを禁止するため，学則や就業規則に明記し，周知する。

②ダイバーシティ（多様な人材を積極的に活用する）宣言をするとか，大学の公文書や宣言に盛り込み，性的指向・性自認，性差別に起因するアウティング，いじめ，セクハラ，パワハラを大学として許さない，という姿勢を明文化する。ただしこの場合，単なる広報やアピール目的で姿勢を示す事はあってはならず，十分に全学的な議論及び合意形成を行うことが前提とされる。

③学生相談室・相談窓口を設置し，それを十分に広報する。例えば，性的指向や性自認に関する相談も可能であることを明示すると，当該学生は相談に行きやすい。それと同時に，臨床心理士，相談員の理解を高める研修を行う。

④キャンパス内の整備と書式の確認をする。多目的トイレ（誰でもトイレ）を設置し，その場所を周知する。更衣室，ロッカーを性的マイノリティの人たちが使いやすいように整備する（一例として個室の設置など）。通名使用の配慮，書類等に性別を書くことが必須なのかを確認をする。

⑤カリキュラムに性的マイノリティへの理解と人権の教育を盛り込む。特に，教職の科目にこうしたテーマを入れることは大切である。

⑥LGBTをはじめとするセクシュアルマイノリティに関する研究に従事する専任教員を迎え入れ，学術研究として取り組む場を大学として整備することも，大学が担う社会的役割の一つであろう。

⑦FD/SDを通じて，教員の言葉遣い，当事者学生への配慮の必要性，対処方法を浸透させる。例えば授業中に教員が性的マイノリティ差別をするような，不適切な言動をしないように徹底する。また，学生がそうした発言をした場合は，大学としての姿勢を示す意味でも適切に注意を与える。

⑧性的マイノリティの学生への就職支援は学生を社会に送り出すために非常に大切である。的確な情報を収集し，提供する必要がある。一例として，LGBTの社員への配慮に積極的な企業のリストを整備するなどが挙げられる。

⑨上記の支援は学生に対してだけでなく，教職員を対象としても行う必要がある。また，個々人への具体的配慮は周囲の先入観で先回りして行うべきではなく，本人がどのような配慮を望んでいるのか，よく話を聞くことが重要である。

性的マイノリティへの支援は，性的指向・性自認のいずれもバランス良く行うべきであることに留意し，取り組んでいく必要がある。

講演会アンケート結果

参加者　計152名

内　訳

・教　員

教授：23，准教授：18，講師：34，助教：18，助手：3，

その他：11

・職　員

事務長：9，課長：3，課長補佐：3，係長：4，主任：5，

一般職：16，その他：5

参加者アンケート結果

今回の講演会についてどのように評価されますか？

(1) とても良い	47%	(52名)
(2) 良い	48%	(53名)
(3) どちらともいえない	5%	(5名)
(4) 悪い	0%	(0名)
(5) とても悪い	0%	(0名)

LGBT学生への支援に係り，次の経験はありますか？
差し支えない範囲で教えて下さい。

(1) 支援体制について協議した（協議している）	(14名)
(2) 本講演会以外の関連講演会や研修に参加した	(13名)
(3) 書籍やインターネット等で調べた	(37名)
(4) その他	(21名)

主な意見

・今までこのような教育を受ける機会がなく，講演を聞く機会もあまりなかったのでとても参考になった。

・初めて聞く内容が多かった。

・自分には関係ないこと，周囲にも存在しないものだと思っていたが，そうではないということが分かった。

・LGBTについてほとんど知らなかったため，理解すること，しようと努める態度が大切だと思った。支援する側として支援の入り口に立てたと思う。

・機会があればもっと勉強してみたい。

・あまり意識したことがなかったが，知らないうちに傷つけてしまったことがあるかもしれないと思った。まず自分達が学ぶことからスタートしていきたい。

・学生一人一人に話を聞き，全て対応する，というのは難しいので，まずは多様な学生が過ごしやすい環境を作ることが課題だと思う。

・LGBT学生と出会った際にまずどうすれば良いかという指針にしたい。

・記憶や理解が曖昧になっている事柄が多かったので，とても勉強になった。

・授業，実習において，自分の言動で気を付けなければならない点を考える良い機会だった。

・授業の中でカリキュラムとして取り入れたいと思った。

編　集　後　記

今回は2月に行いましたLGBTに関する講演会の特集といたしました。この講演会は，これまで開催しました講演会のなかでも，特に聴講者が多い会となりました。それだけ注目度が高かったのだと思います。LGBTの問題も含め，学生の多様化への対応は，今後本学においても大きな課題となると思われます。

（岡野）

北里大学高等教育開発センターニュース
Center for Development of Higher Education, Kitasato University NEWS
Vol.16
発行日　2018年6月30日
発　行　北里大学高等教育開発センター
〒252-0373 神奈川県相模原市南区北里1-15-1
FAX：042-778-9761
発行責任者　岡野　安洋
表紙絵：古矢　鉄矢
北里大学高等教育開発センターWebサイト
https://www.kitasato-u.ac.jp/cdhe/